国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞ソトとウチの接点としての日本語学習：日本人と外国人の日本語コミュニケーション：学習者の「安全な誤用」と「危険な誤用」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 迫田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000953

講演

〈ソトとウチの接点としての日本語学習〉日本人と外国人の日本語コミュニケーション ～学習者の「安全な誤用」と「危険な正用」～

日本語教育研究・情報センター教授　迫田 久美子

はじめに―安全な誤用・危険な正用―

私は四〇年以上、日本語を教えており、学習者の誤用は、食べることと寝ることの次に、大好きです。学習者たちが一生懸命考え、自分たちのルールでことばを書いたり発したりしますので、その中に彼らの文法が見えてきま

ソトとウチの接点としての日本語学習

現在、日本に住んでいる在留外国人数の推移を法務省が調査しました。日本語を学んでいる人は、日本に一四万人、世界では三九八万人、約四〇〇万人いました。実際に日本に住んでいる外国人の数は、最新の平成二七年度のデータでは、なんと二一七万二、八九二人（図1）。一時期少し落ち込みましたが増加を続けています。外国人の方々も一緒に住んで暮らしていく社会が生まれつつあります。私の今日の話の狙いは、ソトとウチの接点としての日本語学習です。日本人と外国人の日本語によるコミュニケーションでは、文法の正確さ以上に、使用の適切さが重要になります。今回、日本語学習者のコーパスを分析し、不適切な日本語使用の背景には、互いの文化の違いが影響している可能性があることがわかったという研究をご紹介したいと思います。

まず、「安全な誤用」と「危険な正用」について述べ、次に、日本語学習者のコーパスの話をします。そして、コーパスの中のロールプレイに焦点をあて、その中の一部の結果についてみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

迫田 久美子（さこだ くみこ）

日本語教育研究・情報センター教授。博士（教育学）（広島大学）。「先生、どうして『電話中』というのに『結婚中』と言えないのですか」など、学習者から多くの質問を浴び、日本語の知識の無さに危機感を覚え、日本語教師を辞めて大学院に入りました。若い院生に囲まれて、教える立場から学ぶ立場になって味わった新鮮な驚きは今でも忘れられません。ノーベル賞を受賞した朝永振一郎は「不思議だと思うこと、これが科学の芽です。よく観察して確かめ、そして考えること、これが科学の茎です。そうして最後に謎が解ける、これが科学の花です。」と言っています。30年近く教えた学習者たちからもらった研究の種、いつか、花を咲かせたいと思っています。専門は、第二言語としての日本語習得研究・日本語教育方法学。主な著書は『中間言語研究日本語学習者における指示詞コ・ソ・アの習得』（1998年、渓水社）、『日本語学習者の文法習得』（共著 2001年、大修館）、『日本語教育に生かす第二言語習得研究』（2002年、アルク）、『日本語教育のためのコミュニケーション研究』（共著2012、くろしお出版）など。

す。たとえば、「○○さんがお客様と電話を望むでしたけど、お客様の外出でメッセジをのこります」。これは韓国ソウルの某ホテルに泊まったとき、ホテルのボーイさんが渡してくださったメモです。日本語母語話者であれば、見て、すぐ、どこがおかしいかわかります。

「あのときのこと、覚えない、高校生、よく覚えた」。これも、だいたいどういうことが言いたいかわかります。あのときのこと覚えていないとか、高校生のときはよく覚えていたということですね。

「花を育つ、野菜を育つ……みんなお母さんがした」。これは、自他動詞の問題です。

これまで、こういう文法の正確さに関する誤用を研究してきたのですが、誤用から何が言いたいかという正しい形式はだいたい推測できます。その意味では、あまり問題になる誤用ではなく、ある意味「安全な誤用」と考えられます（図2）。

しかし、私はここ二、三年海外の日本語学習者のデータを集めておりました。一〇か所くらいに行って、だいたい一週間で五〇人ほどのデータを集めてきます。そのときに遭遇したのがこういう誤用でした（図3）。

私が、「では、これから調査を始めます」と言ったら、「先生、よろ

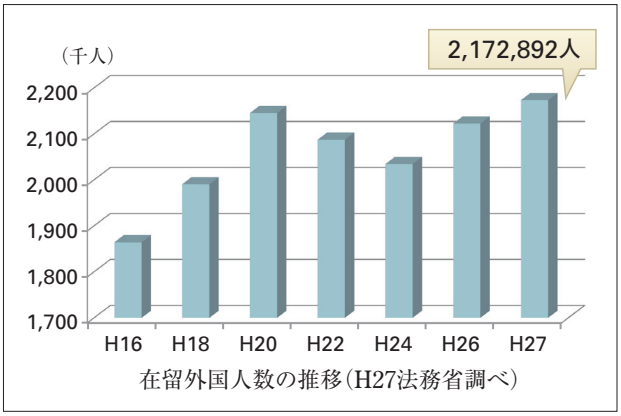

図1　日本在住の外国人の推移

(1) ○○さんがお客様と電話を望むでしたけど、
お客さまの外出でメッセジをのこります。
（韓国・某ホテルのメモ）

(2) あのときのこと、覚えない、高校生、よく覚えた。
（中国・学生）

(3) 花を育つ、野菜を育つ・・・みんなお母さんがした。
（英国・女性）

誤用であるが、正用が容易に推測できる。

安全な誤用

図2　日本語学習者の誤用

(4) T：では、これから調査を始めます。
S：先生、よろしくネ。

(5) T：日本では、学校は4月から始まります。
S：へぇ、そうなんだ。

(6) T：最近は海外でも和食の店が増えたそうですね。
S：そうそう。私も、日本のラーメン、大好き。

文法的には正用であるが、
聞き手には不快感を与えてしまう。

危険な誤用

図3　日本語学習者の誤用

しくネ」という声が返ってきました。それから、「日本では、学校は四月から始まります」と言うと、「へぇ、そうなんだ」という反応でした。「最近は海外でも和食の店が増えたそうですね」と言うと、「そうそう。私も、日本のラーメン、大好き」という返答でした。これは文法的には悪くはありませんが、聞き手は、なんとなくカチーンとくるようなところがあります。私自身がちょっと不快感を覚えたわけです。その意味では、「危険な正用」というレッテルが貼られるかと思います。

最も驚いたのが次にご紹介する例です。アルバイト先の店長さんに、週三日働いているところを週二日にしてほしいということで、依頼のロールプレイをやります。日本語母語話者にやってもらうと、だいたいみなさん、「あのう、すみません、店長さん、ちょっと、お話ししたいことがあるんですが……」で始まります。ところが、おもしろかったのが学習者の言い方です。皆さん、どのように切りだすと思われますか。

「店長さん、ちょっと言いたいことがあります」。これで切り出されたときには、私もほんとうに後ずさりしたいくらい、「そうか、そういう表現になるのか」という、ある意味での驚きでした。学習者は、けっして彼は文句をいうつもりで言っているわけではなく、ほんとうにお願いをしたいのです。たぶん、その人の母語ではこのような言い方をするのかもしれません。しかし、これらは少しの表現の違いですが、お互いのコミュニケーションに影響がでてくるのではないでしょうか。

日本語学習者コーパス

現在、日本語学習者コーパスの構築を目指して作業をしております。『I-JAS ;International corpus of Japanese as a second language』と名付けました。多言語母語の日本語学習者横断コーパス（以下、『多言語横断コーパス』とする）です。なぜ多言語かというと、異なる一二言語を母語とする海外一七か国（二〇地域）の学習者言語の発話と作文データを集めているからです。言語類型をいろいろ考えて、図4に示す一二言語を母語とする学習者のデータを集めました。本日ご紹介するのは、この中の英語、フランス語、スペイン語、中国語を母語とする日本語学習者のデータです。

調査は次のような流れで

12の異なった言語とは？

（語系：ゲルマン、ロマンス、シナチベット、アルタイ、オーストロネシア、スラビック他）

①英語 ②フランス語 ③スペイン語
④ドイツ語 ⑤ロシア語 ⑥中国語
⑦韓国語 ⑧トルコ語 ⑨インドネシア語
⑩タイ語 ⑪ベトナム語 ⑫ハンガリー語

図4　日本語学習者コーパス　I-JAS
（多言語母語の日本語学習者横断コーパス）

1. ストーリー・テリング（ST）
4～5コマの絵を見て、物語を作成。

2. 対話（30分）
半構成インタビュー（共通の話題でおしゃべり）

3. ロールプレイ（RP）　「依頼」と「断り」

4. 絵描写タスク
1枚の絵を見て、日本語で説明

5. ストーリー・ライティング
1.のSTのタスクを一定時間を与えてPCで書く。

図5　対面調査の内容と流れ

行いました（図5）。最初に、四～五コマの絵を見て、物語を口頭で話してもらうストーリー・テリング（ＳＴ）と、三〇分の半構成インタビューです。つまり、自然なおしゃべりのような形で設定された話題の話をしてもらいます。それからロールプレイ（ＲＰ）です。さっき紹介したアルバイトの日数を変えてもらう「依頼」と、「断り」です。さらに、一枚の絵を見て、その描写を日本語で説明してもらいます。最後は、最初に見せたストーリー・テリングを、一定時間を与えて、考えて、パソコンに書いてもらうというものです。本日紹介するのはロールプレイの依頼です。

『多言語横断コーパス』の特徴は、多様な類型の異なった母語の学習者を対象として集めていることと、各地域で約五〇人の学習者データを収集し、国内の教室環境と自然環境学習者も含め、最終的には千人コーパスを目指していることです（図6）。また、すべての学習者に統一の日本語能力テストを受けてもらい、その結果をデータとして残しています。さらに、発話と作文のデータに加え、学習者の音声データも公開を予定していることです。現在、文字化の真っ最中ですが、この春（二〇一六年春）、第一次データとして一二言語の学習者一五名ずつと国内の学習者、それから日本人も含めて全部で二二五名のデータを公開する予定です。残りは、第二次から第五次の公開が計画されており、完成は二〇二〇年、オリンピックの年です。

Ⅰ. 多様な類型の異なった母語の学習者を対象。
Ⅱ. 各地域で約50人の学習者のデータを収集し、国内の自然環境学習者も含め、最終的には1,000人コーパスを目指している。
Ⅲ. すべての学習者に統一の日本語能力テストを実施している（SPOT、J-CAT）。
Ⅳ. 発話と作文のデータに加え、学習者の音声データも公開予定。

図6　I-JAS の特徴

ロールプレイにおける依頼表現

一．先行研究

本日のデータは、ロールプレイによる依頼表現ですが、まず、先行研究を紹介します。志村・生駒（一九九二）は、英語話者で日本語を学んでいる人たちを対象に、断り場面の表現を日本語母語話者と比較して、いわゆる誤用論の転移（pragmatic transfer）が見られることを示しました。具体的に言うと、断りの仕方が、英語話者はたとえ日本語で断っていても、その中にあまり代案を示さない傾向があること、さらに、社会的地位の違い、つまり、目上の人に断っているにもかかわらず、中途終了文（言いさし文）をあまり使わず、直接的にはっきり断る傾向が見られることなどを挙げ、これは、母語の影響ではないか、と結論づけています。

また、鮫島（一九九八）は、中国語母語話者を対象に、初級・中級前期・中級後期の三つのレベルで、談話完成テストを用いて、「依頼」場面での特徴および母語の影響を調べています。これは実際に話させるのではなくて、こういう場合、あなたはどのように言いますか、という談話を完成させる筆記テストでした。彼の調査によると、初級あたりは、「～ください」「～てくださいませんか」といった言い方から、中

級前期になると、「～いいですか」「～てもいいですか」「～ていいですか」というようにかわり、最終的には、「～ですが」のような中途終了文が出てくる段階があることを明らかにしました。特に、「～いいですか」「～て（も）いいですか」といった言い方は、中国語に非常に多いので、これらは中国語の影響ではないか、と結論づけています。

また、猪崎（二〇〇〇）は、フランス語話者の日本語学習者を調べています。日本人母語話者同士の会話では、何かお願いをするとき、「実は、お願いしたいことがありまして……」というような予告部分が用いられますが、フランス語話者の学習者はそのような言い方はあまり使いません。おもしろかったのは次です。「変更の依頼」では、日本人は「お願い」とみなしているようですが、フランス語話者はお願いというより交渉だと考えているようだと述べています。そのため、聞く側、日本人には押しつけがましいという印象を与える、という結論を出しています。

これらは、母語というか母文化の影響があるのではないかと論じている先行研究です。

これらの先行研究は、それぞれ問題点があります。鮫島の場合、実際の会話ではなく談話完成テストです。また会話調査では、対象者が、志村・生駒は一〇人、猪崎は七人と非常に少なく、さらに、いずれも母語を一つに限定して調査しています。したがって、複数の異なった母語の学習者ではどうかという点が謎になっています。

二、ロールプレイの調査

そこで、今回私は、フランス語話者、スペイン語、英語話者、中国語話者、それぞれ一五名、あわせて六〇名の学習者を調べました。彼らはすべてJ-CATとSPOTという日本語能力テストを受けていますので、その点数に基づき、統計分析をかけ、日本語能力が等質レベルと判定された一五名ずつを選出し、日本語母語話者、つまり日本人一五名と比べてみました。

ロールプレイの内容は、「あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。……中略……。いまは、一週間に三日アルバイトしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って、三日から二日にかえてもらうように頼んでください」です。実際の調査では日本語は見せません。それぞれの学習者の母語または英語で作成されたロールカードのどちらかを選んで、読んでもらいます。そして、調査者（日本語母語話者）と対象者が一対一で実施します（図7）。そこでは、すぐに学習者の申し出に了承を出さないで、「こっちも忙しいんで、なんとかなりませんかねぇ」と、くいさがる店長側と何回かのやりとりをします。

結果の分析

結果の分析を紹介します。ロールプレイ全体は比較的に長いのですが、どのように依頼をするかに焦点をあてるために、前半部分のみを三つのパートに分けて分析しました。三つのパートとは、開始部

分（A）、前提部分（B）、依頼部分（C）です。依頼を述べるまでの流れとして、開始部分（A）は「あのー、ご相談があるんですが」から始まって、前提部分（B）「いま、週三日はたらいているんですが」、最後、本題の依頼部分（C）は、「週二日に変更させていただきたいんですけれども」と続きます。これが一般的な日本語母語話者のパターンです。そこで使われている文の種類を説明します。言いさし（中途終了）文とは、「お話ししたいことがあるんですが……」と最後まで言わないで途中で終わる表現です。たとえ言いさしでも、相手も何かあるなとわかります。また、質問文を使う場合は、「いま、ちょっとよろしいでしょうか」のように、相手の様子をうかがうような表現を使います。そして、第三は、日本人には多くありませんが、「店長、話しがあります」のような平叙文です。日本語母語話者にも何人かは使用している人がいました。

調査者（日本語母語話者）
対象者（海外・国内の大学生／国内の外国人就労者）

- 1対1で実施
- ロールカード：互いの役割と対話の内容を説明（対象者の母語または英語）
- 複数回のやりとりを録音する

図7　ロールプレイの実施概要

表1　学習者の発話開始部（A）の文の種類

［開始部の各文の割合］

日本語話者			フランス語話者			スペイン語話者		
中途	質問	平叙	中途	質問	平叙	中途	質問	平叙
90%	0%	10%	17%	50%	33%	33%	33%	33%

英語話者			中国語話者		
中途	質問	平叙	中途	質問	平叙
27%	55%	18%	27%	18%	55%

開始部の結果が表1です。日本語話者の場合は圧倒的（九〇％）に、中途終了文で始まりますが、外国人の場合は多くありません。この結果から、母語にかかわらず、日本語母語話者は、「言いさし」（途中終了）が多いのに対して、学習者はきわめて少ないことがわかります。日本人だったら、「ご相談があるんですけど……」「申し訳ないんですけど……」と言うのですが、学習者はそれが少ないのです。このことは生駒・志村の先行研究を支持する結果となりました。

言いさし文を使わない学習者は、平叙文を使う傾向があり、中国語話者はその割合が高くなっています。いきなり「お願いがあります」とか「質問があります」「話があります」「話したいです」で始まります。一番驚いたのは、最初にもご紹介した「言いたいことがあります」という表現です。これはさすがに少なかったのですが、直接的な表現を使うケースが多く見られました。

また、日本語母語話者は、依頼に入る前に、開始部でまず、自分の依頼を謝罪から始める傾向が見られました。たとえば、「あっ　お時間をとって　すみません」とか「あのー　ちょっとお時間いただけますでしょうか」のように謝罪をするような表現から始まります。このことは猪崎も指摘しています。

次は前提部です。

日本語母語話者の場合、「いま、自分は週三日働いているんですけれ

ども」のように、依頼に入る前に、必ず現状について説明し、依頼の前提を話します。「いま、週三日、入っているんですけど……」「いままで週三日で働かせていただいていたんですけれども……」。このような前提が入ると、聞く側はどうでしょうか。「何か言ってくるな」「アルバイト日数のことだな」ということが、推測できるわけです。

日本人には前提部に、説明が一〇〇%あります。フランス語母語話者にわりと説明がありますが、スペイン語話者や英語話者、中国語話者は説明なしがわりと多くなっています（表2）。スペイン語、英語、中国語話者の場合、前提を省略して本題の依頼にすぐ入る傾向があります。「店長にお願いがありますが、ふつか、週に二日だけ働きたいんです」といきなり本題を切り出します。私も、「えーっと、いま何日働いていましたか」と聞き返すようになります。早く本題を切り出すケースが多いようです。

次は最後の依頼部です。

本題に入ったとき、どんな文の形式が多いでしょうか。

やはり、日本人は「二日にしていただきたいのですけれども……」のような言いさし（中途終了）文です（表3）。本題の部分で中途終了文を使うのは、外国人の日本語学習者にはもしかしたら曖昧ととらえられているかもしれません。学習者は言いさしではなく、「質問文」の割合が高くなっています。具体的には、「二日間にしていただけませんか」「二日はどうですか」などが見られますが、これらは、まだまだ丁寧です。「二日になってもいいですか」は、「二日にさせていただいてもいいですか」のような使役がなかなか出てこないかたちです。

質問文だけでなく、平叙文の割合も高いです。たとえば、「勉強が難しいのでお願いします」「二日だけをできれば働きたいです」などです。「店長　二日だけお願いします」。「いやぁー、こっちもいろいろ忙しいから」と言うと、「いや、お願いします」「お願いします」の連呼だったりします。

「二日だけ働いて、させてください」には、使役を一生懸命使おうとする学習者の気持ちが現れています。この「させていただく」という表現は、学習者にはなかなか難しいのです。「変更させていただく」「二日にさせていただく」がなかなか使えないようです。

そのために、意図が正しく伝わらない問題のケースも出てきます。

表2　学習者の前提部（B）の説明の有無

［前提部の現状説明の有無の割合］

日本語話者		フランス語話者		スペイン語話者	
説明有	説明無	説明有	説明無	説明有	説明無
100%	0%	93%	7%	60%	40%

英語話者		中国語話者	
説明有	説明無	説明有	説明無
47%	53%	67%	33%

表3　学習者の発話依頼部（C）の文の種類

［依頼部の各文の割合］

日本語話者			フランス語話者			スペイン語話者		
中途	質問	平叙	中途	質問	平叙	中途	質問	平叙
73%	20%	7%	27%	53%	20%	13%	47%	40%

英語話者			中国語話者		
中途	質問	平叙	中途	質問	平叙
7%	73%	20%	0%	80%	20%

たとえば、「変更してもらえないかと思って」などは、少し丁寧さが欠けます。「やめていただけませんか」の例は、おそらく「一日やめさせていただけませんか」と言いたかったのでしょうが、これではまったく立場が逆転してしまいます。また、次のような「私は三日の仕事ができませんですから、どうしましょう。どうすればいいですか」と、聞かれるケースもありました。このような言い方は、店長（聞き手）に不快感、誤解を与えてしまいます。

結果をまとめると

まず、第一に、学習者は母語の違いにかかわらず、開始部や依頼部で「言いさし（中途終了）文」を使いません。母語話者であれば、「ちょっとご相談があるんですが……」と言うところを、「いま、暇ですか」とか「話があります」「あのー店長、話したいです」と切り出します。これらは場合によっては、上司である店長に不愉快な印象を与える可能性をはらんでいます。

第二は、学習者は前提を示さず、いきなり要望を提示してくる場合も多く、唐突な感じを与えます。日本人だったら「いま、週三日、入っているんですけど……」と言ったら、「これはだいたいアルバイトの日数の話だな」という推測がつくのですが、前提がなく、いきなり、「店長にお願いがありますが、ふつか、週に二日だけ働きたいんです。いいですか」と話を進めます。中国の学習者には、「いいですか」と念押しするケースが多く見られました。

第三は、母語話者は謝罪表現が多く出てきますが、学習者には謝罪する面は少なく、それは先行研究で猪崎が言っている、「学習者は依頼とみなさず、依頼を交渉とみなしている可能性がある」のではないかと考えます。日本語母語話者の場合、「申し訳ないんですけれども……」「週二日に変更させていただきたいんですけれども……」と、へりくだって話をします。学習者には、「二日どうですか」「二日だけをできれば働きたいです。どうですか、いいですか」といった表現が出てきます。これらの表現は、彼らの日本語能力レベルがまだそこまで達していないという日本語能力の問題かもしれません。しかし、どの国の学習者も、比較的に交渉的な表現が多くなっていました。

おわりに―多文化共生社会のなかで―

二〇〇万人の外国人が住んでいる日本は、これから多文化共生の社会に進んでいきます。その中で、日本の企業が外国人にどんな能力を求めているかを調べてみました（図8）。二〇〇六年の調査によると、圧倒的に「日本語力」です。次に、「日本の社会・文化に適応する能力」、それから、調整力ともいえる「チームワーク力」が出てきます。次に、日本語以外の他の母語を含めての「他の言語能力」と、日本企業文化・働き方への適応力を指す「働き方対応」が同率となっています。さらに、その道の「専門知識」が続きます。これらが、日本企業がいわ

ゆる外国人、グローバル人材に求める内容です。

まとめると、多くの企業が、たとえ外国人といえども日本語で大半の業務を遂行することを期待しているといえると思います。それは、相手や場面において使い分けられる日本語によるコミュニケーション能力です。このコミュニケーション能力とは、単にコミュニケーションできるだけではなく、場面によって、相手によって使い分けられることを意味します。これは、通常の日本語の生活に不自由のないコミュニケーションではなく、相手が何を望んでいるか、何を考えているかを考えたうえでの言語行動、言語能力を求めているのではないかと思います。

この調査の報告書では、非対面型の電話やメールなどのコミュニケーション能力もビジネスに必要な日本語能力と位置づけています。

では、留学生側は企業にどんなことを望んでいるのでしょうか（図9）。

まず、日本人社員の「異文化理解」です。今回のロールプレイでは、私たちはアルバイト日数の変更を「依頼」と考えているのですが、学習者が当然の交渉だ、と考えていたら表現もかわってくるかもしれません。次が、留学生を人材として活かす方法としての「現場での人事」です。もっと留学生を活用してほしいという願いです。次は、充実したビジネス場面に適した「日本語教育」の充実、そして「評価の透明性」が求められています。さらに、年功序列ではなく「能力重視の評価」が、上位の項目として挙げられていました。

これからの私たちの多文化共生社会では、日本語母語話者の外国人に対する異文化理解を深めることが大切です。相手に求めるだけではなく、私たち自身も変わっていかなければならないのではないでしょうか。

また、日本語教育においては、文法の正確さだけでなく、具体的に動画やロールプレイなどを活用して、表現の適切性やことばの伝わり方・伝え方なども具体的に指導していかなければならないと考えさせられました。これからも、学習者コーパスの研究を通して、ソトとウチの接点としての日本語教育の在り方を考えていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」の報告書概要（2007）から
（AOTS：（財）海外技術者研修協会　2006年調査実施）

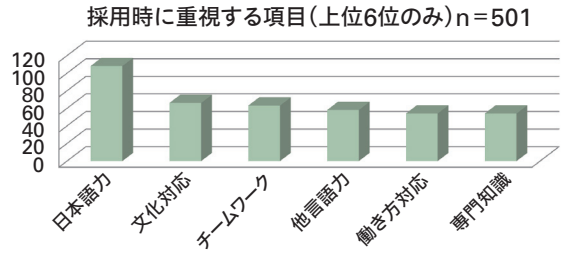

図8　企業が求める外国人の能力とは？

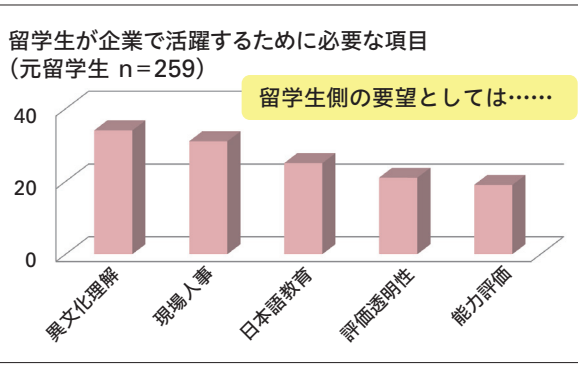

図9　留学生が日本企業に望むことは？